

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 番外編

高目椀物語

文：長谷沼 清吉

文化5年(1808)の代官所への文書に「村中残らず椀細工渡世致し高目椀と申し名産なり」とある。当時は三つ椀(飯・汁・皿)を主に越後へ売っていた。文政12年(1829)、藩主の新発田界巡見時の道筋手鑑に、杉山から現在の喜多方市山都町上林までの27ヶ村の様子が書かれているが、産業の項で塗師とあるのは高目村だけである。漆を塗って付加価値を高めて販売していた。

藩の延享3年(1746)の「移出入品高調」によると入金高に漆椀があり、小荒井組305両余、次に大谷組30両余とある。大谷組の販売高はほとんど高目村と見ている。

なぜ椀作りを地場産業まで高めることができたのであろうか。それは肝煎が木地師を招き、村民に技術を習得させたからと見ている。

木地師の墓がある。荒木のは三方唐破風の笠石に彩色された菊花紋と下がり藤が彫られ、女性の竿石には正面に「青露妙安信女」、三面には「南無阿弥陀仏」と彫られている。肝煎をした高目と漆窪の木地師の墓は台石に菊花紋が彫られ、竿石は高目は破損処分され、また漆窪は「浄心禪定門・妙連禪定尼」とあり、元禄16年(1703)前後に亡くなっている。この当時「信女」は肝煎クラスの名である。

いつ頃から椀細工が始まったのか断定は難しいが、寛文9年(1669)には村松や五泉、塔寺や野沢原町など数ヶ村に出向き具(小さな器)を売っている。

盛んだった椀作りもブナを伐りつくしたので、天保末(1844)で終わったとの伝えが残っている。

この貴重な文化財を守り伝承していくため、関係者のご理解を得て、令和7年9月に富士の郷の花見山に移設した。



移設された木地師の墓

※大谷組とは山三郷の1つで、旧山郷村と新郷の富士と三河で構成している。

今月の表紙

今月の表紙は、2月3日にこゆりこども園で行われた豆まきから。突如登場した青鬼に、園内には園児たちの悲鳴？歓声？の音が響き渡りました。その後、青鬼は勇気あるちびっ子たちの力に押され退散。豆まきは大成功となりました。



編集後記

春の訪れが少しずつ感じられる季節となりました。本年度も残りわずかとなり、慌ただしい日々を過ごしている人も多いのではないのでしょうか。忙しい毎日でも、ホッと一息つく時間を大切にしたいですよ。この広報紙が皆さんのささやかな笑顔のきっかけになれば嬉しいです。

次号もお楽しみに！(三留)

